

情 報

若手の会企画による小集会 (18) 「若手が考える Plant Production Science の未来」開催報告

出口哲久¹⁾・岡村昌樹²⁾・橋田庸一²⁾・森田隆太郎³⁾・山崎諒⁴⁾

(¹⁾ 北海道教育大学札幌校, (²⁾ 東京大学大学院農学生命科学研究科, (³⁾ 神戸大学大学院農学研究科, (⁴⁾ 農研機構)

2015年3月27・28日に行われた第239回講演会(日本大学生物資源科学部湘南キャンパス)において, 2日目夕方に若手の会による小集会を実施した。本小集会は「若手が考える Plant Production Science の未来」と題し, 日本作物学会が発行する英文誌 Plant Production Science (PPS) の現状の問題点を認識し, 今後の発展に向けて若手目線で議論することを目的として開催された。

会の構成は, 発起人による話題提供主体の第一部(16:45~17:30)と, 議論主体の第二部(17:40~18:30)の二本立てとした。また, PPS の編集委員長である大杉教授(東京大学大学院)を招待し, 小集会で出た提案や問題提起に対して随時意見を頂いた他, 開会時にご挨拶を頂いた。参加者は発起人5名・招待者1名を含め26名であった。

第一部では, 発起人3名から順に話題提供が行われた。まず出口から, 小集会の開催前に若手の会のメーリングリスト「sakumo2」を対象に実施した「PPSに関するアンケート」の集計結果について紹介が行われた。手応えのあるデータの投稿先を想定する際に PPS を最優先に考える若手は14%に過ぎず, PPS を全く考慮に入れていない若手が50%を占めていること, 一方で必ずしもうまく行かなかった実験等での投稿先については25%の若手が PPS を再優先に考えていることなどが紹介され, PPS が質の低いデータの受け皿として利用されている傾向が明らかとなった。

続いて森田からは, 同じく国内学会が刊行する英文誌でありながら植物生理学において国際的に高い地位を獲得している Plant & Cell Physiology (PCP) を比較対象として, PPS の施策について考察が行われた。PCP では学会規模の議論を元に, 学会員へのサービスよりも国際誌としての成長を優先させるという方針を決定し, 国際化やインパクトファクターの向上に向けて様々な施策をとることで雑誌としての成長を促進したことが紹介された。続いて PPS 編集委員長の大杉教授への事前聴取を元に現在の PPS の改革案をまとめたところ, それが当時の PCP の改革案と類似していることが指摘された。このことから, PPS でも PCP と同様の成長が期待されたが, 一方で

PCPでは学会員が優れた論文を PCP へと主体的に投稿し, PCP を盛り立てようとしていたことを紹介し, 現在の作物学会員にはそのような意識が欠けているのではないかという問題提起がなされた。

続いて山崎からは「そもそも PPS を盛り上げる意義とは?」という題で話題提供が行われた。PPS への論文投稿が活発化し, 雑誌の水準が上がることの意義として, 日本作物学会が行っている研究が世界に届きやすくなるだけでなく, 作物学研究への予算の付き方等にも影響がおよび, 研究環境の充実度に大きく関わってくるのではないかという論点が示された。最後に, 第一部での話題提供のまとめとして, 「若手が日本作物学会のプレゼンス(地位)を高めたいと思い, その手段として PPS の盛り上げが有効であると認識する」ということが重要なのではないかという提言が発起人からなされた。

第二部では PPS の今後の方向性とその実現に向けた具体策について全体で議論が行われた。まず, 大杉教授への事前聴取で得られた回答から, PPS をアジアの Crop Science におけるトップジャーナルにするという方向性が示されたが, この提言については大きな反対は見られなかった。一方で「現状の広い scope を維持すべきか, 有力な国際誌に対抗すべく scope を絞って特色を出すべきか」「博士課程の学生が初めての論文投稿に挑戦する場として PPS を利用することも多いが, レベルの高い雑誌にするにはそういった論文も高いハードルで審査し, ふるいにかけていくべきか」といった, 学会員サービスと国際競争のトレードオフに関する論点では会場の意見が大きく分かれ, 活発な議論が行われた。会場全体で意見の一致を見ることはなかったが, 学会員サービスの機能は一定程度維持すべきとの声が最終的に大勢を占めた。

小集会出席者に当日配布したアンケートでは, 若手が実力をつけ優良な論文を PPS に投稿していくことが一番の解決策ではないかという回答が多かった一方で, 有名誌にアクセプトされなかった論文の投稿先として重要と考えている回答も依然として多数認められた。

また, 小集会出席者から発起人宛に詳細な意見を記したメールが届き, 「学会員サービスを維持したままで戦え

るほど国際競争は甘いものなのか?」「作物学会の存続自体についても危機感を持つべきではないか」といった、小集会全体を通しての楽観性に対する厳しいご指摘も頂いた。

以上のように、本小集会では若手で一つの認識を共有するまでには至らなかったが、若手が改めて PPS という学会誌を意識し、今後の PPS および日本作物学会自体の盛りあがりを若手が担っていくのだという自覚を促す一

つの契機を提供できたと考えられる。また、本小集会を通じて寄せられた意見が埋もれないよう、発起人側で意見の集約を行い、PPS 編集委員会に提出する予定である。

謝辞：本小集会の開催にあたり、事前の情報収集や当日の運営について PPS 編集委員長の大杉教授、PCP 編集委員長の山谷教授（東北大学）、若手の会メーリングリスト sakumo2 に登録している皆さまに多大なるご協力を頂きました。この場をお借りして御礼申し上げます。